



# おじさんズ通信

2023年4月号 (No.29)

発行元：登別市新生町  
桃柿通 緑風舎  
発行者：おじさんズ3号



バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

## 春光を 求めてひねもす にしひがし (3号)

### 室蘭・絵鞆半島

#### 浜辺を見下ろすは、キリスト様？

4月上旬、春の息吹を感じに室蘭・絵鞆半島の観光道路をドライブし、途中、車を止めては断崖絶壁と外海の景色に心なごませました。

そして、見つけたのが崖の途中で海辺を見下ろし、思案に考えているキリスト様か？ それともプラトン、もしくは原始人？

最初は岩壁に突き出たテラスに思えて、その場で「仙人の腰掛け」と命名したのですが、カメラに収め拡大してみると、あごひげを垂らしたワシ鼻、長髪の人面に見えなくもありません。

観測場所は絵鞆岬展望台から数百メートル測量山側に行った観光道路沿い。海の底に広がる濃い緑の岩礁地帯がくっきり見透かされ、これまた、沖縄のビーチを連想させます。

21世紀にして時計の針を戻すかのように、紛争や戦争の惨禍を繰り返す人類の愚かさを嘆き悲しんでいるのか、断崖の人の懊悩や、いかに。

やがて夏ともなれば、道路沿いに群生するイタドリたちが輝く太陽の季節をおう歌し、断崖の首像も葉陰に覆い隠されるのでしょうか。

早春のこの季節にしか味わえない、一期一会の壁面彫刻が心のアルバムの一枚に加わりました。



\*\*\*\*\*

### 登別・蘭法華

#### 「ほろべつの磯」とは、ここだ

昭和9年の町名改正で「富浦町」に変わった漁業のマチ旧「蘭法華」。「坂下の所」を意味するアイヌ語の「ランポッケ」から、この地名が付けられたのでしょうが、ここから恵山岬方向に向かっての眺めは、松浦武四郎が「東海道一の絶景・薩埵（さつた）峠で富峰（＝富士山）をみるようだ」と絶賛したように、著者不詳の「西蝦夷地高島日記」でも「我が国の近江八景もかくあるまじき」と記されています。

最近、改修工事が終わった蘭法華トンネルの登別駅側に、マイ・ベスト・ロケーションがありました。簡易椅子とテーブルを置いて、磯辺の一幅をめながらコーヒーを一服、といきたいところです。

さて、上の謎めいた表題ですが、本通信の11号（2021年10月）で紹介した石場斎宮（南部藩士・箱館奉行支配調役）が詠んだ歌に関係があります。

「みだれ矢に 立まふ袖を忍ぶかな 霞たばしる ほろべつの磯」

この歌の最後の語句に疑問を呈する人物がいました。今も、おそらく昔も幌別町の浜には岩礁はなく、砂浜なのだから「磯」はおかしい、というわけです。言われてみれば、なるほどでしたが、どうもストーンと落ちない。和歌の名人が、はたして海辺の光景を詠み違えるだろうか？ 無い知恵を絞った結果、ひらめきました。幕末期、東から来て白老のアヨロ川を越えくると「これよりホロヘツ」の標柱ありです。ゆえに彼は断崖からの岩塊散る蘭法華の海辺で、「ほろべつの磯」と詠んだのではないかと推察しました。「ほろべつ」と聞いて、単純に今の幌別町を思い起こすのは、歴史に思いを馳せない現代人の悪いクセと、かの歌詠み人にたしなめられた気がします。同時に「悠久」なる言葉が浮かんできました。



## 名優の自殺をとめた名画

テレビのインタビュー番組で語る映画監督、山田洋次さんの話に耳をそばだてました。

劇団民藝の創設者で俳優、演出家、映画監督でもあった宇野重吉さん。太平洋戦争が始まる直前、好きな芝居も禁止され、兵役召集も目にみえていることから自殺を考えたが、「その前にもう一度」と足を運んだ映画館で観たのがアメリカ映画「スミス都へ行く」。この名画を見終わって、宇野さんは死ぬことを思いとどまったといえます。

自宅にDVDがあったので早速、視聴しました。ストーリーを書くとき長くなるので割愛しますが、「自由とは本だけで理解できるものじゃない。日々の生活の中でも感じて欲しい。理想と発言の自由の尊さを…」とのうたい文句通り、感動ものでした。同時に日本で公開された昭和16年夏が、「鬼畜米英シネマ」として徹底的に排斥され、戦争へと突き進む時代への分水嶺だったことを実感しました。

### 昭和16年の映画雑誌



その裏付けといえるのが、昭和16年8月1日発行の「新映画」と題する雑誌です。めくると、ありました。「新着映畫解説」のタイトルで2ページにわたり紹介されています。

「アメリカの政治家を扱った風刺ものの快作を紹介しよう」との書き出しで、筆者の長谷川幸雄さんはジェームス・スチュアートをはじめとするキャストやスタッフ紹介、本物と寸分違わぬ上院議事堂の大セットを10万ドルの費用をかけて造り上げたこと、あらすじなどを綴っています。

文章を読み通すと「自由」や「正義」「政治の腐敗」などといった言葉はまったく出てきません。

裏を返せば、鋭く光る検閲の目をいかにかいくぐる文章に仕上げるべきか、苦心の跡がそれとなく窺われます。

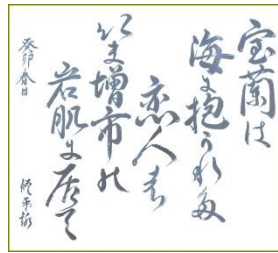
そして(名匠フランク・キャプラ監督の名作を多くのファンに紹介できるのも、これが最後か)との悔しい思いとともに、腹の底では軍人に牛耳られた政治への怒りをたぎらせながら、コラムを書き進めていたのかもしれない。学ぶべし、昭和16年…です。



## 散策路で「あや?」 1

### 平仮名が読めない

マスイチ浜展望台に、この地を詠んだであろう歌のプレートがありました。しかし、平仮名の一部が読み取れません。最後の「癸卯(みずのとう)」は、ちょうど今年に当たりますから、60年前に詠んだ歌だとしたら1963年=昭和38年になりますが、作者の名前も「?」です。後日、室蘭観光協会の窓口で尋ねたのですが、こちらも「?」。どなたか、「!」を返してくれる方、いませんか。



## 散策路で「あや?」 2

### 黄色い潜水艦にする?

先述した登別・富浦の浜辺で見つけたのが、まさに潜水艦を連想させる長さ20センチほどの石ころでした。寄せる波の石工が生み出した見事な造形物です。

これに色を塗ると、某テレビ番組のナントカ・アートになるようです。このままでいいか、それとも黄色く塗って「イエロー・サブマリン」にしちゃおうか。結果は次号にて。



### 薫風 烈風

▶とかなんとか、書き連ねているうちに29号も何とかサマになりました。今月は、夏に発行する「文芸のぼりべつ」42号の創作や随想作品の推敲や編集のお手伝いをする事になりました。しかし、文章も十人十色で小見出しを挿入すべきか、難しい漢字にルビを振るべきか否か、まこと旅の僧がこの扉、推すべきか、敲(たた)くべきかーの体験、再びでした。

▶もう一つ飛び込んできたのが、登別商店会の盛り上げに日々、東奔西走する会長さんからのチラシ作成依頼。1年たつと辞めたお店あり、新規開業のお店ありの栄枯盛衰世のならいです。それでも他のマチのシャッター通り商店街に比べたら、コチラは頑張ってますよ。そして、久方ぶりに通常スタイルの「一期一宴桜ざかウォーキング」に、近隣の方はぜひ参加を。それでは、皆さん、お元気で〜。

登別市観光交流センター **ヌブル** オープン記念  
登別桜ざか 桜ざかウォーキング  
2023・5/7-14  
5/14(日)9:00-13:00 Start Goal }ヌブル